

窪川高等学校

生徒の「やりたい」を、学校と地域が応援し、実現できる場所。

今年度、文部科学省より県内の中山間校では唯一、「DXハイスクール」に指定された窪川高校。少人数だから、新しいことに挑戦しやすく、教員や3名の専属コーディネーターと地域住民が連携し、その挑戦を全力でサポートする環境が「最大の魅力」です。



DXコーディネーター
前田 喜久子さん

お問い合わせ先 / 窪川高校 ☎22-1215

挑戦から得た確かな手応えと成長
「今までの常識を捨て、何かぶっ飛んだことをしたかった」と、令和6年11月23日に開催された「新文化祭」を生徒が振り返ります。単なる学校行事ではなく、町のイベントになるような「文化祭」にしようと、令和5年度にリニューアルされた窪川高校の新文化祭。
2年生が中心となり、企画から準備、運営の全てを行い、地域の協力を募りながら開催しています。以前は300名だった来場者は今年900名を超え、生徒の新たな挑戦は確実に実を結び、生徒自身やその周辺にも大きな変化をもたらしています。

この学校だから実現した傘アート！

中庭に飾られた300本のカラフルなビニール傘。生徒の自由な発想が、今年の新文化祭に彩りを添えていました。
「無謀な提案だと思ったけど、みんなが協力して形にしてくれた」と生徒は笑います。仲間とやりたいことに挑戦できる学校。これ以上の青春はないのかもしれない。

「生徒の挑戦が、学校の雰囲気を変えている」

「町営塾じゆうく。」の塾長を務めたこともある前田喜久子さん。今は、窪川高校のDXコーディネーターとして、最先端の情報技術を生徒たちに楽しく伝えています。
「以前と比べると、学校の雰囲気が変わってきています」と前田さん。「これは、生徒の挑戦を先生や地域の方が応援してくれる環境にあるんです。」
この環境こそが、生徒たちの新たな発想、さらなる挑戦を生み、学校の雰囲気を変えているのです。

「生徒たちには、この3年間、もっともつとやりたいことに挑戦してもらいたいです。この学校は、それがやりやすい環境なんだから」と笑顔で話してくれました。

生徒の自主性と地域との関わりが来場者の胸を打つ

令和6年11月16日、創立70周年を記念する式典が挙行され、四万十高校若衆太鼓がオープニングを飾りました。地域の太鼓グループ「四万十川とどろき太鼓保存会」の協力を得て、約2か月間の稽古を積み、この日を迎えました。

節目となる式典で、地域の伝統文化である「太鼓」を、地域住民の協力を得て生徒が披露できたことは、地域資源を生かした教育環境づくりに取り組む今の四万十高校そのものように感じました。

「グッパ」も掛け声が違う!?

グーとパーでチーム分けをする際に用いる「グッパ」。そんな掛け声さえも、「県外生は違うき、おもしろい」と地元生は笑っています。
会話の中にもいろいろな地域の方言が混ざる日常。多様な価値観や経験を持つ生徒同士の交流は、私たちの想像以上に、十代の生徒たちにとっては大きな刺激となっているようです。

「自分で起業できる大人になってもらいたい」

9年前に地域おこし協力隊として着任し、今は四万十高校の地域学校協働活動推進員を務める小野雄介さん。学校と地域をつなぐ橋渡し役として、地域資源を生かした教育環境づくりに取り組んでいます。

「最近感じることは、地元学生の積極性です。県外生との学校生活や地域の方々との交流を通じて、良い刺激を受けているんでしょうね」と小野さん。「子どもたちには、将来、仕事がないから地元に残れないって、言ってほしくないんです」と言います。

小野さんのその思いがまた、子どもたちの刺激となり、主体性を高めていくのです。



地域学校協働活動推進員
小野 雄介さん

お問い合わせ先 / 四万十高校 ☎27-0034

四万十高等学校

県外生との学校生活が青春に発見と刺激を加える。

全国でも数少ない「自然環境コース」が設けられ、四万十川中流域の豊かな自然が学べる四万十高校。近年、「地域みらい留学」にも参画し、全国から入学者を募集。地元高校に居ながら、県外生との交流ができる環境は「最大の魅力」です。



「なぜ」という発想で取り組む総合的な探究活動 / 体育館での体育祭も思い出し / かぼちゃにペイントする美術部 / 県総体の応援に向かうバスの車内 / 自分たちも楽しんだ新文化祭 / 修学旅行では町の特産品を大阪で販売 / イベントで生徒同士の絆が深まる / 歓迎イベントへと変化した体育祭